

光明

第拾卷第參號

厭へば即ち娑婆永く隔つ
祈へば即ち淨土に常に居す
隔つれば即ち六道の因亡じ
輪廻の果自ら滅す
因果既に亡じて
即ち名と頓に絶ゆるをや (般若讚)

大眞日本 光明團本部發行

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和三年三月十五日發行(毎月一回十五日發行)

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
昭和三年三月十五日發行(毎月一回十五日發行)

光

明

第拾卷第參號

定價金拾錢

住岡狂風 著 トツレフンバ

惱める女性の胸に

定價參拾錢 送料貳錢

念佛の父

定價四拾錢 送料貳錢

◆ 合 掌 宣 言

第一、我ば之れ久遠劫來の業苦に憐む。されど、傷き痛み憐める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我ばこれ曾無一善唯知作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生き給ふみ親、罪惡如深重煩悩熾盛の我を其まゝ救ひ給ふ。

第三、惠まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する憐しき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたまふ永遠の光明。聞せん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。

第四、善くば自力小我の迷妄を破し、み光にはからばれて無我報謝の歡喜に生きん。

第五、「四海の信心の人皆兄弟」其處に共存の涙わく。共に和ぎ、慰藉し、奮勵して、相愛に生きん哉。

◆ 本 領

毀譽褒貶に動ずるなかれ。滿境に失意する勿れ。而境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一法に精進せよ。

救はれたる者はやつて、全人類救済のために、熱き血と涙とを以つて、念佛報謝宣願のために、濁亂の社會に猛進せよ。

△ び 叶 の 頭 卷 △

生きる者の心は躍る

見よ群生の上に春は輝く。

花も咲くだらう

小鳥も歌ふだらう

されど散る花に無常を感じた人もある。

花の咲くも束の間である。

盛なるものゝ裏に哀愁かくれ、

死滅の裏に永生あり、

榮枯盛衰は因縁の假相

眞如……………如來……………南無阿彌陀佛……………

如來の願力のみ永遠の大生命にたまします。

何を思ふや散る花の木影に？

無我の仰信

住岡狂風

平凡

『親鸞しんらんにをきてはたゞ念佛ねんぶつして彌陀みだにたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて信しんするほかに別に子細こさいなきなり。念佛ねんぶつはまことに淨土じゆつどにうまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄ぢごくにおつべき業ごうにてやはんべるらん、總そうじてもて存ぞん知ちせざるなり。』

親鸞しんらん聖人しょうにんははるゝ關東かんとうからたづねて來た真劍しんけんなる同行どうぎやうにむかつて

『然しかるに念佛ねんぶつより外ほかに往生おしじやうの道みちをも存知ぞんちし法文ほふんなどをも知しつてゐるだらうと思おもふならばそれは大きなあやまりである。若もし六ヶ敷むつかしい學問沙汰がくもんざたなどがほしければ、徹山てつざん

あるひは南都なんとにゆくならば、賢かしこい學者等がくしゃらうも多おほくゐらせられることであるから、其處そこをたづねて往生おしじやうの要よう、よくよくきかるべきである。』

と申まをされました。聖人しょうにんが物ものめづらしいことをたづねて來た同行どうぎやうたちにもかつて念佛ねんぶつより外ほかに、真向まうこうからお示しめしになつたことは實じつに眞實しんじつに金剛こんごうの信念しんねんに生いきたまふ聖人しょうにんの衷心さうしんよりの宣言せんげんであります。其處そこには一點いってんの疑念ぎねんもありません。追従ついでんもなければ、妥協たうぎやうも機嫌きげんとりもありません。念佛ねんぶつは愚禿ぐとくの生命せいめいであります。

何なんといふ平凡へいぼんであらふか。しかし徹底てつていした偉大いだいなる平凡へいぼんであります。平凡へいぼん！人は平凡へいぼんをきらひます。奇抜きぼつ 不思議ふしぎ 新式しんしき 複雑ふくざうを好みつゝ、皮相ひさうから皮相ひさうへと流轉りうてんするのであります。しかし井戸みどを掘ほるのに横よこからほつては水みづは出でませぬ。思想しそうから思想しそう講演こうげんから講演こうげん、説教せつけうから説教せつけう、講師こうしから講師こうしへ、にぎやかに横よこに移うつつてゆく所に、眞しん如にほ法ほ性の清水しやうしみづがくめませうか。古い井戸みどでもい、其底そのこから清きよい水みづがわく。

南无阿彌陀佛なむあみだぶつ！ それはあまりに平凡へいぼんである。しかしくめどもくつきぬ法のりの水みづが

不斷にわく、昨日も其清水にうるほひ、今日も亦其清水に養はれる。平凡なる哉。平凡なる哉。『古池や蛙とびこむ水の音』何たる平凡の情趣であるぞ。しかし其平凡の裏に天地自然が動いてゐる。南無阿彌陀佛！それより外にすべてなし。八萬の法藏を知ることも此の焦点をつかまぬ者は愚者である。魚は大海に生きる。生きる魚は大海を知らぬ。信の一念！それはこの大海を知りやうもない我等が、知らぬまゝに知るのである。

『念佛より外に何かあると思ふならばそれはあやまりである。』と云ひきつた親鸞聖人のみ言葉はいよ／＼さね渡つて來る。

『親鸞にをきては

たゞ念佛して

彌陀にたすけられまゐらすべしと

よき人のおほせをかうふりて

信するほかに別の子細なきなり。

念佛はまことに淨土に生るゝたねにてやはんべるらん

また地獄におつべき業にてやはんべるらん

總じてもて存知せざるなり。』

親鸞におきては

聖人は決して單なる説教者ではない。

「おまへたちば」と云はないで、親鸞におきてはである。千萬人はゆかすとも我はゆく人の正覺を見てあきれて感嘆してゐるのではない。我がものにならぬ限り、釋尊の佛敎は釋尊のものであり、法然上人の念佛は法然上人のものである。むかふにながめて美しいものにみだれたとて自分の生きる道ではない。自分のものになしきること、これこそ大切であります。血と涙とによつて開かれた、たつた一つの生命道！それ

が念佛ではなかつたか。

萬人の道よりも先きに愚禿親鸞の道であつた。

『親鸞におきては……』老ひて老ひまさぬ聖人よ、聖人は遂に説教者ではなかつた。無量壽如来をおいては聖人はない。聖人が聖人である所以は唯徹頭徹尾借物をもたれず、聖人自身の信の世界に生きられたことにあります。

自ら信じられないで、どうして人に信せさせられやうぞ。

『親鸞におきては……』との一句が私たちの心を無限に反省せしめます。

信ずるとは

『親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよきひとのおほせをかうふりて信するほかに別に子細なきなり……』

一言をさしはさむことも、一言をのぞけることも出来ませぬ。

『たゞ』は唯であります。そのたゞは、念佛してと、信ずるとの両方にかゝります。たゞ念佛するとは信後の生活はこの念佛一つにて定る意味であり、『たゞ信する』とは、彌陀にたすけられると信するだけで他に信の相のないことであります。よき人とは七高僧のことであり、近くは法然上人のことであります。念佛 彌陀 よき人 おほせ かうむる 信心 等の信仰確立の要素が、唯一句の中に盛られてしかも、一点の疑義なく表明されてあります。

或る時、淺右衛門が三河の牛窪の長松の所を訪ねて云ふのには、

『御文章を拜讀すると、彌阿の本願を信せずしてはふつと助かると云ふことあるべからず。とあるが一体信するとは如何なることか、どうぞ信するといふことを聞かしてくれ。』

とたのんだ。すると長松が云ふには、

『後生の一大事は親様におまかせするとまでは聞いたが、信するとは頂いてゐない

それは俺にもわからぬ。これから一寸聞いて来る。」

とて長松は庭におりて草鞋をはきはじめました。淺右衛門はあきれて、

『そんなに急なことをしなくてもよい。序のあつた時間聞いてをいて下され。』

『他人から不審を尋ねられて、それを知らぬとてほつておかれるものか。一大事だから是からすぐ上京致します。』

とて出て行かうとするので淺右衛門も氣毒に思ひ、

『それならば路銀を差上げやう。』と云つたが『俺に用意もある。』とて出發してしまつた。三河から三日三晩かゝつて道を急いで京都につきました。上京するとすぐ香月院様の寓を訪れてお目にかゝり、

『私の所へ淺右衛門同行がまいりまして、御文章の中に、「彌陀の本願を信せずしとはふつとたすかることはあるべからず」とあるが信するといふことについて聞かせと申します。この長松は後生の一大事は親様におまかせするとまでは頂いてゐま

すが、まだ信するごまでは頂きませぬ。信するとはどうすることで御座いますか、一言おきかせにあげかりたくてわざ／＼まいりました。』

と申上げると香月院の和尚はしばらく考へてゐられたが、やがて

『それは御苦勞であつた。それは大切のことである。明日は講釋をやめて、講者一同立合の上で一應調べて聴かせてやろう。しばらくやすんでおれ。』

との仰せであります。そこで宿に下つて待つてゐますと、翌日學寮から使が来て「調べがついたから来い」このことであります。長松が早速出かけて見ると、學者講師のおレキ／＼の列席された中へ呼び出されました。香月院は長松に『昨日不審のおもむき、今一應申しあげられよ。』といはれた。そこで長松は重ねて

『彌陀の本願におまかせするとまでは頂いてゐますが、信するごまでは頂きませぬ信するごとはいかなることで御座いますか。』

と申し述べると香月院さまは。講師様方を顧み、末座の五乘院様にむかつて

『五乘院、その方かはつて授けられよ。』

どの仰せである。そこで五乘院は進み出で、長松にむかつて

『長松。その信ずるとは、佛祖善知識の仰せに順ふことであるぞ。』

といひ渡された。流石は長松である。たゞちに問ひかへしました。

『その佛祖善知識の仰せとは、如何なる仰せでございますか。』

すると五乘院は

『長松、何程慾が起らうと、何程瞋恚の炎が燃わやうと、機のみまいへば、鬼でも蛇でも其まゝ救ふの仰せじやぞよ。』

このお言葉に

『左様な仰せでございますか。それならば信せられます。信ぜられます。』

とて、すぐ歡びく三日三晩かゝつて三河へかへり、淺右衛門にこの由傳へました香月院講師等の長松に對する答は、親鸞聖人のお言葉と合致してゐます。『親鸞に

おきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別の子細なきなり。』

よき人とは佛祖善知識のことであり、善知識は法に生き、法を説く人であります。

『信ずるとは佛祖善知識の仰せを信ずること……………。』

『佛祖善知識のおほせとは、如何なる悪人でも救ふところの如來の勅命そのものである。』

こゝに教主と教主とがはつきりしてゐます。教主はごこまでも如來であります。しかし教主だけでは救ひは成立ちませぬ。其處に必ずなくてはならぬものは教へを示す善知識であります。教へを説く人なくしては決して救ひはない。しかし善知識は善知識であつて、教主ではない。

我等は、信じ得る善知識を通してはじめて、无我の信仰に入ることが出来ます。

『よき人のおほせをかうふりて信ずる外に別の子細なきなり。』

この一句は極めて大膽なる斷言であります。そこに唯光つてゐるものは『よき人のおほせ』であります。よき人の仰せのみが光つてゐて全ての我がありません。

しかしこゝに注意しなくてはならぬことは、法然上人を盲滅法に信じられたのであらうかといふことであります。この問題は可なり考へて見ねばならぬ問題であります

聖人はもと／＼叡山南都において、たつた一つの眞實を求めて走つたお方であつた若し鋭い批判の眼がない方であつたならば、叡山の佛敎にとゞまられたかも知れないしかし聖人の衷心は何ものにも満足が出来ず、あらゆるものを引破つてゆかれましたさうして一切のものゝ前に心から跪いて満足することの出来なかつた方であります二十年間、下らなかつた頭が、遂に法然上人の前にのみ徹底的に下りました。それは

決して盲従でも屈従でもなかつたのです。それは上人の上に眞實なるものゝ見たからであります。眞實を求めぬことは六ヶ敷い。眞實のみ敎にあふことも難い。更に眞實を眞實と認容することは猶更困難であります。

然るに聖人は法然上人の上にこの唯一の眞實の輝きを見、其み敎に徹底的に頭か下りました。それは師上人の上に念佛による救ひを確證され、其み敎の一句一句が聖人の肺腑をついたからであります。かくて心からなる満足を得られたのであります。

一切の我慢がありません。一切の理窟が抜かれてあります。大膽なる敎への信順であります。親戀さらに診らしき法を廣めずとは、聖人の御持言であります。法を我がものがほにする人でなくて、大法を如來のもの善知識のものとしてすなほに信順されたのであります。若い者たちの陥る醜さの一つは、『僕の宗敎は、僕の信念は、私の人生觀は、私の、俺の……』と社會的認容も、内容の眞實性をも眼中におかないで、我の一点張りで得々とするのであります。

大法は如來のものであり、眞實は個人の所有ではありませぬ。聖人が師の上は一切の光榮を奉つて、『よき人のおほせをかうふりて信する外に別の仔細なきなり。』といふ無我の態度に、かぎりなく尊ぶ心をおこします。

我等は我執のために、眞實の大法をけがしてはなりません。いかに我執がどれぬ限り、眞實は黒幕の中におほはれます。

まかせきつた信

聖人の信仰はますます大膽に表自されてゆきます。

『念佛はまことに淨土にうまるゝたねにてやはんべるらん。また地獄におつべき業にてやはんべるらん。總じてもて存知せざるなり。』

これはおそらく信仰の極致の味であります。念佛が極樂への種であるか、地獄への業であるか存知しないのみ云葉であります。凡聖の一切のはからいが棄つて、全く

無我の信の味であります。蓮如上人は、御一代開書に

『極樂は、たのしむと聞いて、參らんと願ひのぞむ人は佛にならず。彌陀をたのむ人は佛になると仰られ候。』

人は我執の心で一切を割出します。我執の心は功利主義の心となります。功利の心がはなれないために、信仰心にもこの不純な心が作用します。

祈願請求の心が神佛にむかつて動きます。低级なところでは、病氣を治したり、福運を願つたり、商賣繁昌を祈つたりします。神が福運をくれたり、商賣繁昌を助けてくれたり、することのために、信心や祈禱を捧げることこれを信心だと思つてゐます。こうした傾向は一度安藝をはなれて東にむかへば、だん／＼と盛になりまします。神でも佛でも信心すれば、悪いことはむいては來まい、と思ふ位で祭つてゐます。

蓮如上人はこの心を如來への信仰の上にもつて來て、極樂へまいりたいばかりに自力の信心を如來に捧げようとする不純の心に鐵槌を下されたのであります。

自分が頭の中に描いた極樂にまいつて、生死の苦を逃避しようとする聲聞根性を満足するために、如來をひき合ひに出して信心の對象にしようとする。そうしたはからひによつては絶對に佛にはなることは出来ない。然ればどうするか、

『彌陀をたのむものこそ佛になる………』

極樂にまいらうとはからうごとく、彌陀をたのむことは、根本に差があります。眞に彌陀をたのんだ、信のすがたこそ

『念佛はまことに淨土にうまるゝたねにてやはんべるらん。また地獄におつべき業にてやはんべるらん。總じてもて存知せざるなり。』

と仰つたすがたであらねばなりません。

一切の功利の心がされた無私の仰信であります。私の心で地獄か淨土かを思ひかためて、その自力建立の信の上に如來をひつばつて來るのではなくて、法藏の願心の中にこそ、一切を超えて淨土への白道が内在されてあります。二つのものを解決してお

いて如來を信するのではなくて、信することによつて解決せられるのであります。

眞實の信樂は、祈願請求の心ではなくて、満足の心であります。微塵も凡夫より如來へ求める心ではありませぬ。合掌することによつて假想した佛に助けて貰ふのではなくて、眞に如來が助けたまふたすがたこそ、合掌であります。合掌のすがたは如來によつて、満足せしめられ眞實の國への第一歩を旅立つたすがたであります。如來によつて然らしめられたすがたであります。

信心の異名である、信樂といふみ言葉は、第十八願、絶對他力の信を表はされた言葉であります。信心といふ言葉は各宗に使ひますけれど、信心と云へば、凡夫のはからひ心から出た信心もこれをふくんでゐます。しかし信樂は決して凡夫の迷心ではなくて佛心の開顯であります。

信卷の信樂の釋には、聖人は

『次に信樂といふは、如來の満足大悲圓融無碍の信心海なり。この故に疑藍間雜あ

ることなし。かるが故に信樂となづく。

と仰せられます。則ち信樂とは如來の信心海であります。その如來の信心海を具體的にいへば満足。大悲。圓融。無碍であります。如來心が、すでに満足であります。この如來心の満足と、私の満足と二つはありません。南無阿彌陀佛は如來の満足であり、私の満足であります。眞實によつて満された心であります。歡喜賀慶の心であります。決して利益ほしさに出した乞食の手ではありません。この心は如來大悲の信心の体得であり、圓融まごやかな心であり、一切の煩惱に碍げられぬ無碍の光明であります。

然るに多くは、極樂に往生することが出来ると思ひかためたことを信心と思つてゐます。思ひかためたものは、相對のはからひであります。何時もくすれます。くすれたならば、更に次なる思ひをかためます。かうしてはからひからはからひに流轉するのが、若存若亡の人たちであります。

ま な こ

安心決定鈔には、

『歸命の一念に、本願の功德をうけとりて、往生の大事をこぐべきものなり。歸命の心は、マナコのごとし。攝取のひかりは日のごとし。南無はすなはち歸命、これまなこなり。阿彌陀佛はすなはち他力弘願の法体、これ日輪なり。よつて本願の功德をうけとることは、宿善の機、南無と歸命して、阿彌陀佛ととなふる六字のうち、萬行萬善恒沙の功德、たゞ一聲に成就するなり。かるがゆへに、ほかに功德善根をもとむべからず。』

とあります。南無は歸命であり、彌陀をたのむ心であり、信樂であります。如來心であるがまゝに、衆生のまなこであります。心のまなこであります。如來を信知し、衆生を知るまなこであります。まなこはまなこであつて、決して、思ひかためたもの

でもなく、凡夫の斷片的なはからひでもありません。如來の智慧そのものであります。この如來の智慧こそ念佛の智慧であります。念佛が極樂のたねか、地獄の業か、全くはからひのなくなつた世界であります。

まことの前に

聖人は信樂の字訓釋において「眞實誠滿の心なり。」と申されました。まことに信樂とは如來の眞實、至誠の心にはねぬいたやすらかな満された心であります。まことの心に感ずる心はまことの心であらねばなりません。信ずる心が、凡小の煩惱の心でなくて如來廻向の南無の心であるとの聖人のみ教を心から感肺せずにはゐられませぬさうです。信樂とは決して功利心のために思ひ惱んだり。つくろつたりする心ではなくて、絶對の眞實に通ずる心であります。

永遠の靈の故郷たる涅槃界、淨土を後にしてさまよへる久遠の流轉の子は。靈の故郷との間に、我と我がつくれる疑惑の鐵扉をおろして、限りなき反逆を眞理の殿堂に加へつゝ、惡道に苦しむ者であります。如來の本願は、如來の久遠の親心の顯現であります。さまよへる子の上に、如來心はどゞいたのであります。

私どもが若し私自身に忠實でありますならば、其忠實なる歩みのすがたとして、善き知識のみおしへのまゝ、に精進する人となるであります。善き人の教は私たちの眠れる心を根底からさますであります。私どもが、自らの善にほこつて他人の惡をさばき、或は自らの善に高あがりし、自らの惡に泣くのは、眞實の教を受けとる、忠實な心が欠けてゐるからでありますまいか。

親鸞聖人のように自ら省ることに忠實であつた方にだけ、眞實なるみ教の前に忠實であり得たのでありませう。眞實のみ教のみ前に出された時、我が心に巢喰ふ我が打ちくだかれて、自分のすがたに氣づく時、どうして高あがりしてゐられませう。

久遠の業障を内觀しては、それを一身になふて行かねばならぬ……………

それがよし永遠えいゑんの地獄ぢごくでありませうとも、逃避たいひも出来なければ、ごまかしも出来ませぬ。刑罰けいばつをおそれて日本中を逃げ廻まはつたり、内々ないなくですまして貰ふことを哀願あいがんする心こゝろそれは決して救すくはれたものゝ相すがたではありませぬ。佛智ぶつちは尊嚴そんげんであります。一歩いっはのごまかしもゆるされませぬ。妥協たけふも陶睡たむりもゆるされませぬ。佛智ぶつちは我等われらに、正しいものゝ見方みかた、正しい私わたしの見方みかたと、正しい生き方を示しめします。大地だいちの上に合掌がつしやうせる心こゝろ、それは『極樂ごくらくにゆき得るならば』といふやうな豫定よていや、條件じやうけんをつけた心こゝろのすがたではありませぬ。

如來にららいの大悲だいひは如何いかなる罪濁ざいじやくの衆生しゆじやうをも棄すてませぬ。いいに光明界こうめいがいに内觀ないかんされた衆生しゆじやうこそ如來心にららいしんの照てし出したものでなくてはなりません。かくて我々われくは久遠くゑんの業障ごうじやうを一身いつしんに負おひつゝ、善よき知識ちしきの前まえにみ教おしえをき、み教おしえのまゝに充みされて合掌がつしやうします。『親鸞しんらんにおきてはたゞ念佛ねんぶつして彌陀みだにたすけられまいらすべしとよきひとのおほせをかうふりて信しんずるほかに別べつの子細しさいなきなり。』どの信仰しんどうに生き得るのであります。

執持鈔しやくぢしやうの中には、聖人しやうにんの同じやうな味あじわひが出てゐます。

一 『たとひ彌陀みだの佛智ぶつちに歸きして念佛ねんぶつするが地獄ぢごくの業ごうたるをいつはりて往生淨土おうじやうんじゆの業因ごういん三ぞと、聖人しやうにんさづけたまふにすかされまいらせて、われ地獄ぢごくにおつといふとも、さら下くだにくやしむおもひあるべからず。そのゆへは明師めいしにあひたてまつらてやみなましからば決定惡道けつじやうあくどうへゆくべかりつる身みなるがゆへなり。しかるに善知識ぜんちしきにすかされたまふつりて、惡道あくどうへゆかばひとりゆくべからず。師しとともにおつべし。されば地獄ぢごくたりとも、故聖人こしやうにんのわたらせたまふところへまいらんとおもひかためたれば、善惡ぜんあくの生しやう所じよわたくしのさだむるところにあらすといふなりと、これ自力じりきをすて、他力たうりきに歸きするすがたなり。』

『善惡ぜんあくの生しやう所じよわたくしのさだむるところにあらす』とはまことに徹底てつていしたお言葉ことばであります。往生淨土おうじやうんじゆといふことは、信仰しんどうの中心問題ちゆうしんもんだいであります。決して往生淨土おうじやうんじゆの否定ひていではありません。けれども、十八願じゆはちはつがんの信仰しんどうが。如來にららいの願心がんしんにかへり眞實しんじつの信心しんこうにかへ

ることである以上、極樂のための念佛や極樂のための信仰は決して、眞の往生淨土ではありませぬ。(つづく)

× × × × × × × ×

『講演の旅』

□二月二日三日、深安郡山野村小學校。

の友人である。二日間氣持よく滞在させて貰ふて三日福山市中井醫院にかへつた

山野村婦人會・處女會、補習學校等、女子のみに對して二日午後二時より二時間

□五日―七日 蘆品郡宜山村福專寺、石井醫院主催、石井の奥様は急病重態であつたのが不思議に助つた其およろこびに講演會をされたのであつた。五日石井醫院について、福專寺で講演、初對面とは

三日午前は村青年團。村斯民會等男子のみに對して二時間の講演、學校所在地殿

川は感じのいい所、校長羽原守雄氏は私

の岩成は都合でやみになつた。

思へぬほど、皆様としつくりした心持になつて、暮させて貰ふ。何かしら地方の方々や寺院の方々としつくり一つになつたのは嬉しい。雪が降つたのにかゝわらず、集つて下さる方々もいよく眞劍で離れられない印象のうちに結ばれた。吉藤智水前講。

□十日 再び宜山村禮善寺。是非一般村民に今一度聞かしたいとの、石井先生其他のお望みから、十日が一日暇なのを利用して再び石井醫院にゆく。今度は石井先生が在郷軍人分會長であるために、在郷軍人や青年團が主体である。十一日朝かへる。

□九日 福山市公會堂。精神文化協會は『映畫と講演の夕』を開催、講題『眞理は永遠の太陽なり』映畫は亞細亞の光である。無料公開であつたため、聴衆一千五百名の大盛會、十一時閉會した。八日

の友人である。二日間氣持よく滞在させて貰ふて三日福山市中井醫院にかへつた

□五日―七日 蘆品郡宜山村福專寺、石井醫院主催、石井の奥様は急病重態であつたのが不思議に助つた其およろこびに講演會をされたのであつた。五日石井醫院について、福專寺で講演、初對面とは

三日午前は村青年團。村斯民會等男子のみに對して二時間の講演、學校所在地殿

川は感じのいい所、校長羽原守雄氏は私

の岩成は都合でやみになつた。

亂れぬ足なみによつて健實な發展である
 一日藏王山に登つて辨當を開いた。寺の
 境内、梅が満開である。十三日夜自動車
 は私と松浦とを福山に運ぶ。

○十四日―十七日 福山精神文化協會、
 會場光善寺、晝席は信心獲得章の御文章
 を味ひ、夜は『眞理の名告』の題で話す
 話がかたかつたけれど、眞劍な求道者で
 満たされた。河内町の中務氏は十四日に
 東京からの歸途を立ちよつて聴講。其他
 遠方よりの同行も集つた。

○十八日―二十日 深安郡百谷眞光寺

したそれからすぐ電車によつて府中にゆ
 く、荒木狂華君と一緒にある。

○二十一日―二十三日 蘆品部府中濟世
 軍、慶照寺についたのは日も暮れた頃で
 ある。普選の結果が刻々に發表されて人
 心がおど／＼してゐる。府中濟世軍へは
 これで二回目である。三願轉入について
 語る。二十二日夕方には備後製糸の女工
 さんたちに語る。二十三日禪僧村田物外
 氏と一緒に、分隊長江草氏の宅にま
 ねかれた。江草氏宅有周呉服店は府中一
 の建築で、豪壯なものである。二十四日

御院主さんのお顔が見ゆる奥さんのお顔
 が浮ぶ、待つてゐて下さるのだと思ふと
 限りなく心が躍る。疲れきつた体を留雲
 樓に横へた。何も皆なつかしいものばか
 りである。『先生この度は二河白道です
 よ』との御院主様のお言葉で、二河白道
 を語つた。いもばら 菅町地方から眞劍
 な人たちが集る。おちついた三日間をす
 ごして、二十一日朝早く出發。

○二十一日午後三時より、深安郡中津原
 小學校で、中津原 上岩成 下岩成 森
 脇四ヶ村聯合の青年大會に出席して講演

朝慶照寺の皆様を送られて出發。

○二十四日、五日 深安郡法城寺村、西
 蓮寺。吉岡志一氏は昨年中井入院以來こ
 のみちに志され、輛の講習會にも出席さ
 れ遂に今度同氏のあつせんで開會に至つ
 たのである。吉岡氏は府中まで迎へられ
 て正午前吉岡氏宅に入つた。日當りのい
 い南の廊下で、吉藤君『これはおちつけ
 る』と連發してゐる。誠にいゝ農村であ
 る。二日間の講演、熱心あふる、空気で
 閉會、五日夜福山の皆様と中井醫院へ
 ○二十六日 姫路東洋紡績、

市外野里の東紡工場に自動車がつくと可

愛い同胞たちは門外に整列して待つてゐてくれる。父親が来たほごよるこんでくれる。二時から五時までお話する。今晚どうしても宿られないのでお機嫌の悪いことおびたゞしい。悲しい涙の袖を別つて、七時幾分の汽車にのる。福山に歸ると夜十二時前である。体が綿のやう

口二十七日 午後二時から西町、河相氏宅座談會、豪壯な宅である。通された座敷には、口羽少將夫人其他數名の婦人がゐられる。河相末亡人を中心六時まで

語つてかへる。

口二十七日—二十九日 川口村支部 崇興寺、毎日中井から一里の道を通ふことになつた。大盛會のうちに閉會、特に二十九日夜は、中井先生 三島氏 其他青年たちも皆集られ。極めて緊張した會であつた。

かくて一ヶ月の多忙な講演の旅をおはつて、三月一日午後二時の急行で、廣島へかへる本部の例會である。

花籠

☒外は靜かに雪の降る一月の十五日でありました。おタイヤでもあり、親鸞聖人をしのぶにふさわしい日、東京本部では團員が集つて一日中語り合ひました。これはその時のみんなのヨセガギであります。

▼真理は常に全否定のかたちをとつて顯はれる。(西岡(命城))

▼越路の雪をしのぶよに

親鸞様をしのぶよに

六つの花が咲きました

しづかに照す電光に

寂しき子等はうなだれて

めぐみの話きいています

いだきいだかれ涙ぐみ

見あい見交すひとみには

不思議には、ねみ見ねます (法子)

▼死を知るは生を知るなり

▼眞實の未來主義は現實主義と一致す (久保鶴枝)

▼今日もまたみ法の川の水のめば

かわきし心うるほいにけり (石田むゆう)

▼あまりにも力なき我涙しつ

光りもどめて歩みきたれど

み佛のみ光我を照せども

心の底より拜み得ぬ我

地上の快樂を求めつゝ、その夜沈黙の中に靜かに自己をみつむればあまりもうつろなる我が心。淋しき心をして力なき私よ…………… (高村さみこ)

▼頭のにぶい私、高慢なものだけで何事にも徹底し得ない私、何もわからなくなつた恥しい／＼私です。けれどもお育てを受けさせて頂く様になつたことを思ひますといひしれぬ喜びを感じます (湘間ますこ)

▼すべてはぶちこはされました

たゞ求めねばならぬ私を知るのみ (笠

敏子)

▼わかつた様でわからない……………でも私は如來のお救の中にあることだけは信じられる様な氣がする。(たけこ)

▼日頃の願がかなつて座談會によせて頂いたことはうれしうあります。まだ何も分りません。あまりにも自分のことすら分つてゐないことに氣づきました。行くべき道も分りませんけどたゞみ心のまゝに…………… (木田英子)

▼今朝から友の赤い思想の話も聞いた

行き詰つた社會を思ふ。

眞實の行者よ出でよ……………

私のこの貪しいみにくい血汐が行詰つた人達のおやくにたつのなら悦こんで使つて頂こうと思つた…………… (紫線)

東京本部の座談會は熱心なる臺氏の努力により第二十四回を迎へ、女子部座談會六回、外に西善寺に於ける一般座談會六回、本部に於ける男子部の座談會十二回である。主として集合するものは男子部は日本大學早稻田大學東洋大學の學生中心であり、女子部は東洋大學千代田女子

専門學校女子醫學專門學校千代田女學校等が中心である。團員數も昨年十一月より舊の四倍に増加し求道熱も盛んに月二回の座談會も待ち遠く時には臨時に開くこともあります。八千切れるやうな生命をもつたものが集つて人生を語るに時を忘れることはとても想像つかぬうれしさであります。忙しい地上であります。最早人生の中ばに來ました。残り少い人生になさねばならぬ仕事はあまりに多いのです。又ゆつくり語りませう。

(東京本部にて釜淵紫線)



心む尊

人と人との尊び合はない世界では、おいついて生きてはゆかれぬ気がします。自分たちの周囲に假令、大きなつまずきをした人が出て来ませうとも、すぐそれを冷たく裁かずに理解して、其悪業をもつて其人を卑下したり、見くびつてしまふようなことのない心もちで生きたいと思はずいあられません。きたなさも醜さも知りつくしても猶その底に動かすことの出来ない價があることを見ぬく廣い智慧の持主になりたいと念じないではゐられませぬ。醜さが裁かれるだけで獨自の個性が認められない世界では眞ののびる世界はないからであります。

そこ身自

悪い子供を持った親がありました。初めの頃は親は此の子を責めただけ責めました。責てもくちつともよくならなければかりか、益々悪くひねくれて来ます。やがてはこの子ををなほしてやりたいと云ふよりは憎悪のために一層叱ります。こうして親と子とは一緒に暗い世界へおちてゆきます。

しかし或時親の上に目覚めねばならぬ日が来しました。深い内省に立つた時子供以上にひねくれた醜いものを我がうちに見たからであります。むしろ子供の上に自分の姿を見たからであります。親は子供をせめられなくなりました。さうして恥ないでは生きれなくなりました。やがてもう子供ではなくて自分の心が問題になつてきました

愛と心熱

大野村に來ました。こゝには大原さんといふ一家大人數揃つての求道家があります。この佛教會館の御世話は濱本老と大原さんが主になつて御世話が出来てゐます。この前に來た時即ち十一月に大原さんは雞飼をはぢめてゐられました。その時のひよこが今はおおなになつてゐます。聞けば五百羽のひよこが五百四十四羽になつたそうです。妙なようですが、それはこうです。名古屋地方から送られたひよこには百について四羽づゝ死ぬるのをあてに餘分がそゝてあります。それが死ななかつたのです。本宅をはなれて畑のなかに雞舎があります。大原さんはこれにつき、りです。夜も其處へねられます。大原さんは雞のためにやさしいお父様です。

熱心！ とは愛の問題であります。熱心！ 愛！ それは何よりもすぐれた手段を生みます。出来たか出来ぬかといふ前に熱心と愛があつたかどうかを考へませう。熱心と愛があつたなら、たとひ形は失敗でも、それ自身成功です。

× × × × × ×



獅子吼

はてしなき大廣野の中に

大地をふみしめて歩く

雄々しの獅子よ！

『ウオー ウオー』

その一聲に 萬獸鳴を静める

彼は決して真似をしない

猿のこうかつさもない

犬のような虚勢もなければ

狐のような小賢さもない

彼は彼自身の道をゆく

み佛よ！

南無の一念に

歸命の一心に

其處に輝きたまふ久遠の報身佛たるみ佛よ！

説法獅子吼！
群生の上に響流する正覺の大音
一心に大心力に歸命しまつる

獅子よ！

おん身はおん身自身の威力に生きる
人格者！

人格は言葉ではない。重さであり。大きさである。

髪そりをもつて小細工しても、大きな竹はきられない。
小さい小細工よ！ おん身自身がぼろ／＼こはれる。
なせきれないのか！

重みがない。重みは力である。

言つてることに權威がない。

美しいけれど裏が見ゆる ぶりきのやうな薄つべら

そも／＼お前自身が信じてゐるのか

信じた心には力がある。

一言の裏にかくれた千金の重み

眞劍であるならば、

自然の叫びであるならば

子供の一言でも 大きな男を支配する。

聖者……………

彼等はみんな信じきつた。
信じきつた所にだけ力がある。

獅子は山の中でもしくである。野原の中でもしくである。

狐の中間で狐を装ひ

羊の仲間羊を真似る

おゝいやしい迎合よ！

おゝ淋しい偽善よ！

攻撃がおそろしいのか。名がほしいのか。

自信なき者の不安な顔色

その子を千尋の谷底につき落す獅子の愛
甘くされることだけが愛のすがたか。

温室さきの花を貰ふた、

四日旅してかへつて見たら、彼の葉はしほれてゐた。

たつた一人廣野に立つ

「前へ！

けれども何處へ？」

さうした嚴肅な人生にふれよ

人真似がゆるされぬ 借物が役にたゝぬ。

其處から湧いたものだけが汝自身の力である。

世が冷酷だといふのか

人が無常だといふのか。

それは汝の無智である。利己主義者よ。高慢の樹の上におつて誰がお前を相手にす

るものか。卑下の穴にかくれて誰が見出すものか。汝は汝自身すら知らないのだ。小さい小屋の窓から人生をながめて、善悪の名をつけるお前は閑人なのだ。世間が汝にしまける一切が汝自身の總和である。安息所から出でよ！ 生きた人生の聲も、佛法僧の三寶の聲も聞かぬではないか。天日は今日も輝いてゐるのに。

獅子は今日も廣野を雄歩し。

如來は今日も法界に遊歩したまふ。

合掌して歩め！ 信念の上に汝自身の白道がある。

セラシオ

光明團創立十週年紀念大會は、都合により本秋までのばすことにいたしました。

注意

- 一。誌代拂込の際は光明と聖光との區別をばつきり記すこと。
- 一。轉居通知は新舊兩住所を書いて下さい。
- 一。誌代拂込は振替を御使用下さい。切手は使はぬこと、やむを得ぬ時は五厘か貳錢切手に限ります。
- 一。文空をばつきり正確にお書き下さい。
- 一。主管に特別の用事の外、申込、中止、送金等は一切事務宛に御送附下さい。
- 一。誌代前金切の時は、ごうかお早く御送金を願ひます。お困りのお方は共御旨申越し下さい。

本誌定價	
一部	金 十 錢 (郵税共)
一ケ年	金 壹 圓 貳 拾 錢 (郵税共)
毎月 一 回 十 五 日 發 行	
昭和三年 二月 十日 印刷	
昭和三年 三月 十五日 發行	
編輯兼發行人	花 岡 靜 人
印刷 人	佐 々 木 温 三
印刷 所	光 明 團 印 刷 部
發行所 廣島市八丁堀二十六番地	
光明團本部	
振替貯金口座下關貳叁〇八番	